

レイメバンバ共同体博物館の現状と課題

上原なつき (名桜大学)

キーワード: コミュニティ開発、博物館、コミュニティミュージアム、チャチャポヤ文化

Situación actual y dificultades del Museo Comunitario Leymebamba

Natsuki UEHARA (Meio University)

Keywords: Desarrollo Comunitario, Museo, Museo Comunitario, Cultura Chachapoya

1. はじめに

発表者は現在、JICA 海外協力隊として 2025 年 5 月から 2026 年 12 月までの計 1 年 8 ヶ月間 (国内外訓練期間を含めると計 2 年間)、ペルー北部のアマソナス州チャチャポヤス郡レイメバンバ村にあるレイメバンバ共同体博物館 (Museo Comunitario Leymebamba. レイメバンバ博物館とも表記されるが本発表では西語表記に基づき和訳。) にてボランティア活動を行っている。職種はコミュニティ開発である。

レイメバンバ共同体博物館は 2000 年に設立され、2025 年 6 月に創立 25 周年を迎えた。当博物館には、1997 年にレイメバンバ村近郊のコンドル湖 (Laguna de Los Condores) のチャチャポヤ文化の墓から発掘された 219 体のチャチャポヤ・インカ期のミイラが収蔵・展示されている。

ペルー国内に現存するミイラの多くは先インカ期のものである。かつてインカ帝国の帝都であったクスコに現在ある複数の博物館には、いくつかのミイラが展示されているものの、発掘場所等の来歴が不明なものがほとんどである。このような現状において、当博物館のチャチャポヤ・インカのミイラは、年代および発掘場所が明確なインカ期のミイラとして非常に貴重とされており、海外でもたびたび展示されている。

また、同じくコンドル湖の墓で発見された 33 個のキープ (結縄記録) もレイメバンバ共同体博物館には収蔵されているが、発掘時の状況およびそのコンテクストがわかるキープとして資料的価値が高いとされる。これらを含め 2,000 点以上の様々な物品が当博物館には収められている。

地方農村にある小さな博物館でありながらも、これら考古学的価値の高い資料が収蔵されてい

るため、国内外研究者の訪問も後を絶たない。

このように、世界的に有名なレイメバンバ共同体博物館が JICA へボランティアを要請したということは、現状において何かしらの課題があり、その課題の解決ないし改善を求めていると考えられる。ちなみに、JICA 海外協力隊が当博物館で活動するのは発表者が初めてとなる。

2. なぜ「コミュニティ開発」の要請なのか

まず浮かぶ疑問として、レイメバンバ共同体博物館はなぜ学芸員ではなくコミュニティ開発の職種でボランティアを要請したのかという点である。当博物館から JICA へのボランティア要請理由は以下の通りである。

レイメバンバ博物館は、観光を通じた持続可能な博物館として、地域における観光および文化の中心としての役割を担い、州全体において教育・文化・経済的な発展に貢献することを目指している。現在、地元民で構成されるレイメバンバ博物館協会には約 30 名が参加、必要に応じて博物館業務を支援しているほか、様々な意思決定にも参加している。隊員には、地元住人とレイメバンバ博物館の関係性をより強固なものとするための活動が期待されているが、それに留まらず博物館をより良くする提案や、多方面にわたる活動を求めている。博物館協会メンバーだけでなく、地元住民が博物館に愛着をもち、自分たちの文化を誇らしく感じられるような博物館を目指している [JICA 2023]。

最後の一文にあるように、「地元住民が博物館

に愛着をもち、自分たちの文化を誇らしく感じられるような博物館を目指している」というニーズから、「コミュニティ開発」の職種で要請がなされたといえる。また、当博物館には考古学専門の職員が1名、写真学および博物館学が専門の職員が1名いるため、学芸員ボランティアは現状のところ必要とされていない。

上記のニーズから、ボランティアとして発表者が現在取り組んでいるのは、将来、博物館を支える存在となる地域の子供たちに博物館に親んでもらうと同時に、地域の経済発展と伝統工芸継承を実現するため、地元の工芸家らと協働して子供向け工芸ワークショップを実施している。その他、高齢者から地域の昔話および歌謡の収集と撮影記録も予定しており、無形文化の継承と資料保存にも取り組む予定である。

3. 共同体博物館の所有と運営について

上記の要請理由ではレイメバンバ博物館協会 (Asociación de Museo Leymebamba) にしか言及されていないため、当協会が運営を担っているように読み取れるかもしれないが、実際に当博物館の運営・管理を担っているのは、生物考古学者の G 博士が代表を務める NGO セントロ・マルキ (ONG Centro Mallqui) である。先述の職員2名は当 NGO に所属している。

セントロ・マルキはミイラ研究を専門とする研究機関であり、レイメバンバ共同体博物館の他に、ペルー南部のモケグア州イロにもミイラ研究所を有している。

コンドル湖岸壁の墓でミイラが発見されたことをきっかけに、ミイラ研究の専門家である G 博士に白羽の矢が立った。G 博士のそれまでの研究業績と、セントロ・マルキが研究機関として海外から資金援助を受けている実績が評価されて、発掘だけでなく、博物館設立と運営までを任せられることとなった。

G 博士がセントロ・マルキの代表と博物館の館長を兼任しているため、両機関は混同されやすいが、博物館の所有者はあくまでもレイメバンバの地元住民であり、形式上はレイメバンバ博物館協会がその所有組織となっている。

レイメバンバ共同体博物館は「共同体博物館」ではあるものの、レイメバンバ村やチャチャポヤス郡などの行政はおろか、文化省などの公的機関からも一切、経済的支援を受けていない私立博物館である。運営費は入館料収入のほか、セントロ・マルキが海外の複数機関から受けている資金援助である。

当博物館の所有組織であるレイメバンバ博物館協会は、現在約30名の会員を有している。レイメバンバ博物館協会は日常の博物館運営や管理には直接的には関わらないものの、必要な際に会議を開き、その承認や決定を担う。また、重要な議題の場合は当協会だけで閉鎖的に会議を行うことはせず、村役場、レイメバンバ観光協会、農業者協会、教育センター、文化の家など、地元の様々な組織にも出席してもらい、共同体全体で話し合っただけで承認を得るというプロセスを重視している。

4. レイメバンバ共同体博物館が抱える課題

パンデミックによる来場者数の減少と収入減、航空便の少なさと悪路によるアクセスの不便さ、パンデミックを機に創設時から勤務していた地元従業員が次々に退職、従業員が近隣住民同士のためその人間関係が職場に与える影響、地域住民との協力体制作りの中心人物であった従業員の休職、館長の人脈や研究業績への評価による海外からの資金援助への依存および館長の高齢化に伴う持続可能性への危惧、コミュニティへの運営移行を目指しているものの村役場が博物館の価値を真に理解しているとは言い難い状況など、様々な課題が挙げられる。

【主要参考文献】

- Guillén, Sonia, Peter Lerche, Evelyn Guevara, 2011, *Chacha motivos en el Museo Leymebamba: Diseños para el arte y la artesanía*. Gráfica Real del Perú SAC, Lima.
- JICA, 2023, 「2023年度秋 要望調査票」、『JICA 海外協力隊 HP』。 <https://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/index.php?m=Info&yID=JL32723B02>